

東洋大学陸上部も必勝祈願する 川越八幡宮の神主さんは サブスリーランナー

日本全国に8万社あるといわれる神社のなかには、健脚に縁のある神社はいくつか存在するが、埼玉県川越市にある川越八幡宮は、足腰健康に縁があることに加えて、21代目の神主を務める榊原祥光さんは2時間36分8秒の自己ベストを持つサブスリーランナー。さらに箱根駅伝で2連覇中の東洋大学も必勝祈願に訪れるというランナーならば1度は訪れてみたい神社。ランナーの情報交換の場にしたい、という榊原さんに話を聞いた。

Yoshimitsu Sakakibara

榊原祥光さん(43歳) 川越八幡宮 神主



「マラソンは体力はもちろん、メンタル面の影響も大きいスポーツですから、お参りをして、精神面を安定させてレースに挑んでほしい」と榊原さん

師走も目前に迫った11月28日、埼玉県川越市で18年ぶりに開催されたロードレース「小江戸川越マラソン2010」の6km地点。ボランティアの1人として走路員を担当しながら、温かい眼差しでランナーに声援を送るのは、地元、川越八幡宮の神主を務める榊原祥光さん。地域の人たちからは、いつもニコニコ笑顔の優しい神主さんとして親しまれる一方、夕方になるとランニングウェアに身を包み、颯爽と人間川サイクリングロードを駆け抜ける、ランナー神主さんとしても知られている。

「地元の大会ですから、自分も走りたいたいという気持ちもありましたが、最近では納得いくトレーニングが積めていないので、裏方にまわりました。レースは自分にとって日ごろのトレーニングの成果を発表する舞台だと思っているので、やれるだけのことはやったという状態で出たいんですよ」

フルマラソンの自己ベストは9年前の防府マラソンでマークした2時間36分8秒。現在も月間250kmをコンスタントに走っているが、毎月400km近く走っていた当時と比べてしまうと、レースに出ても納得の走りができないのは明らか。最近では小学生の息子さんと一緒にファミリーの部などの短い距離への出場にとどめている。

「3人の子宝に恵まれて、しばらくは子育て中心の生活でしたが、早いもの

で一番上は小学5年になりました。一番下の子も来年は幼稚園に入るので、ようやく子育てがひと段落しますから、本格的なトレーニングを再開します。そのために、これまでも最低限のトレーニングを続けてきたので、今から楽しみです」

「おめでとうございます」が
あいさつ代わりの職場

江戸時代の街並みが残り、関東の小京都と呼ばれるなど、近年は観光地として注目が集まる埼玉県川越市のほぼ中心に川越八幡宮は社を構える。全国に約8万社あるといわれる神社のうち、最も多い約1万5000社を占める八幡宮のなかでも、総本社の宇佐八幡宮(大分)から勧請された、1000年近くの歴史を誇る由緒ある神社だ。

「八幡宮は戦いの神様を祀っているのが、境内には足腰健康の神様として知られる民部稻荷神社も祀っていることもあり、スポーツ選手の参拝が多いのが特徴です。箱根駅伝で2連覇中の東洋大学や城西大学など、近隣にキャンパスのある大学駅伝チームの選手やスタッフの方も、大会の前には必勝祈願に訪れるんですよ」

榊原さんが神主になろうと決めたのは大学4年生のとき。世の中はバブル



4年前に川越市から「都市景観ポイント賞」が送られた裏参道は、50mほどに渡って朱塗りの灯籠が並ぶ趣きのあるたたずまい。神社までは川越駅から徒歩6分ほど

「核家族が進んでいるので、気軽に悩みを打ち明けたり、相談できる人が身近にいない人が増えていることをひしひしと感じます。私は若輩ですから、話を聞いてあげるぐらいしかできませんが、少しでもお役に立てればと思います。もともと神社には門がなく、誰にでも開かれた場所です。子どものころは境内が遊び場だったり、日本人にとっては、親しみやすい場所です。地域に住む、さまざまな世代の人たちが集まる場所として、神社の役割を高めていければと考えています」

こうした取り組みの一環として、地元の吹奏楽団による「ちんじゆの森コンサート」や現役力士を招待しての「こども相撲大会」など、境内を使って様々な行事に取り組んでいる。

「東洋大学が箱根駅伝で初優勝したときは、監督代行をつとめた佐藤尚さんに、地元の人たちを対象にした講演を行ってもらい、大変好評でした。コンサートも相撲も、直接は神道と関係ないことですが、まずは地元の神社として親しみを感じてもらい、心のよりどころとしての存在になっていければ嬉しいですね」

ランナーが集まる情報交換の場にした

職業としては「サービス業」に分類

絶頂期ということもあり、就職活動は完全な売り手市場。華やかな雰囲気のある一般企業への就職にも魅力を感じたが、先祖が代々守り続けてきた神社を自分も継いでいきたい、という思いが次第に強くなり、21代目の神主として家業を継ぐことにした。

「父からは幼いころもふくめて神職に就くように言われたことは1度もなかったのですが、特にプレッシャーはありませんでした。神主というのはお祝いの席に呼ばれることが圧倒的に多いので、『おめでとございます』があいさつ代わりなんです。みなさんの嬉しそうな顔を見ながら仕事ができるのは、とても魅力的な仕事だと感じるようになったのも理由です」

七五三、お宮参りといった境内での行事だけでなく、竣工祭、地鎮祭、商売繁盛祈願など、神社を離れてお祈りに出向くことも多く、日曜や祭日も関係ないので、休みはあつてないようなもの。もちろん年末年始は大忙しだ。

「大安、仏滅、友引といった六曜は、本来は神道には関係ないのですが、みなさん、お祝いごとはお日柄の良い日に行うことが多いので、仏滅の日などにお休みをもらうようにしています。出場大会を探すときも、まずはカレンダーを見て、仏滅の日曜日をチェックするのが先です。どんなに魅力的なレースを見つけても、お日柄の良い日にあたってしまったら、やはり仕事が優先になるのは仕方ないですね」



神社の入り口にある鳥居は神域との境界を示している。その鳥居の下には、八幡様と足腰健康にちなんで、八の字をかたどった足形が参拝者を迎えてくれる



ランナーに人気の足腰健康御守は社務所にて500円で授与してもらえる。レースウェアに縫い付けるもよし、ランナー仲間へのプレゼント用としても好評

健康と精神のコンディション維持にランニングは最適

中学、高校時代は剣道部に所属し、四段の腕前。もともと走るのには得意だったため、高校時代は駅伝大会に助っ人として借り出されることもあった。

「高校が神宮外苑のすぐそばだったので、瀬古選手や新宅選手、佐々木七恵選手がものすごいスピードで練習しているのを見ながら走っていました。習慣的に走るようになってからは大学生になってから。1人で好きな時間にトレーニングできるのが自分の性格に合っていたようです」

大学4年のときには学生生活の思い出作りとして、秋田の田沢湖マラソンで初フルに挑戦。タイムは3時間15分ぐらいたったそうだが、忘れられない思い出になったそう。

「偶然、同宿だったコニカの佐藤敏信選手（現トヨタ自動車陸上部監督）が優勝したのですが、レース当日まで2泊したのは佐藤選手と学生だった僕の2人だけ。田舎の宿だったので、一緒に夕食を食べながらレースについて色々話を聞かせてもらえて、とても楽しかったです」

大学卒業後は伊勢神宮で神主になるための研修を受け、その後も父親の下について一人前になるための修行の身。ランニングは続けていたものの、マラソンでのタイム短縮を意識してト

レーシングに打ち込む余裕ができたのは、20代後半になってから。

「入間川のサイクリングロードは往復すると25kmの距離がとれることもあり、長い距離を走るのには得意だったのですが、市営の陸上競技場のトラックでスピード練習を入れてみたところ、記録がグンと伸びました。20代最後のレースとなったつくばマラソンで、2時間39分57秒をマークして、別大マラソンの参加資格をとることができ、その後の5年ぐらいいは多いときには月間500kmを超えて、本当に必死でトレーニングしていました」

ランニングのトレーニングに取り組むことは、精神面、体力面の両方から神主としての仕事にもプラスに繋がっているそう。

「お祝いの席に呼んで頂くのですから、まずは元気がないと失礼にあたりますし、神主が体調不良で欠席なんてことがあつては申し訳が立ちませんから、この仕事は健康管理が一番大切といつても過言ではありません。そして、自分自身がおおらかな気持ちで、笑顔でニコニコしていることも大切です。そのためには精神的に余裕がないと、どうしても表情に出てしまいますから、そのどちらにも効果バツグンなのがランニングなのです」

神主としてのオフィシャルな仕事の依頼はお祝いの席が多い一方、神社には不安をかかえてお祈りに来る人も多く、相談役や愚痴の聞き役になること

されるという神主さんは地域貢献と同時に経営者としての手腕も問われる。

「少子化の影響でお宮参りや七五三の参拝者は減りますし、神前結婚式も右肩下がりでですから、将来的なことを色々考えていかないとけません。埼玉県神社青年会という集まりの会長を務めています。そんなお守りが若い人に人気なのかなど、情報交換も行っていますし、神主の嫁不足も深刻な問題です。これからの時代、それぞれの神社が特徴を出していくのも大切だと思います。うちの神社は足腰健康に縁がありますし、私も走っていますから、ランナーの人たちが集まり、マラソン談義に花が咲くようなランナーの情報交換の場にしていきたいと思っています」

地元のランナーだけでなく、川越観光のついでに遠方のランナーも立ち寄ってもらえる場所になるのが、神原さんの夢。

最後に、初詣などでランナーが神様をお願いをするときに、何かいい方法がないか尋ねると

「こんなタイムを出したい、速くになりたい、といった個人的なことばかりをお願いするのはなく、まずは家族や周囲の理解があつて走れるのですから、おかげさまの気持ちを忘れずにお参りして欲しいですね。そのほうが気持ちのいいお参りができて、きっと快走に繋がりますよ」